

若い教師への「よい」授業を創るための指導・助言

## まずは「真似る」ことから始めさせよ

小清水町立小清水小学校 校長 寺 本 聡

### 0

これは、オホーツク管内「教育づくり研究会（現「学校づくり研究会）」会報に寄稿したものに修正・加筆したものである。この会報原稿を書くに当たり私が意識したことは、次の2点である。

- ① T O S S を知らない人にも分かるように、T O S S の実践を記す。
- ② 自校の職員に読ませることを意識して記す。

限られた紙幅の中で、T O S S で学んだ実践を、それを知らない多くの方々を対象に記さねばならない。独りよがりになってはいけない。

また、この機会に自校の職員にも配布し、指導する意図を持って記すこととした。

なお、与えられた題材は「管理職として」どう取り組むかである。

以下、会報誌に寄稿した原稿であり「3」「4」「5」の部分を今回の原稿に合わせて修正・加筆したものである。

### 1

『よい』授業を「創る」ことは、口で言うほど簡単なことではない。このことを、どれだけの教師が明確に自覚し、分かっているだろうか。

「よい」授業とは、意図的に計画し子どもに力を付ける授業である。子どもが「分かった」「出来た」と、達成感や満足感を得られる授業であり、知的な授業である。

「創る」とは、実用日本語表現辞典によれば次の通りである。

何かを創造する、創始すること。意味は「作る」と違わないが、原形となるものが何もないところから作り上げる「創造」のニュアンスを出す際に「創」の字が当てられることが多い。（※下線 寺本）

お分かりのことと思うが、敢えて「創る」という表現を用いた場合はそう簡単なことではないのである。それよりも、実は、授業を「創る（作る）」前に教師として「授業を行う」上で身に付けておかなければならないことが多くある。

例えば、子どもへの目線である。これは、教室内での立ち位置や意識にも関係するが、授業中全く子どもと目を合わせない（合わない）教師はいくらでも居る。これでは、子どもの様子など見取れるはずもなく、子どもへの適切な指示・指導などできる訳がない。立ち姿（「教態」というが）も大切である。教師のだらしない格好での授業は、授業の雰囲気

気も適度な緊張感の無い締まりの無いものになる。場合にもよるが、教師が椅子に座ったままの授業など論外である。(実際、以前にこのことで若い教師に指導したことがある)

例えば、子どもへのあたたかくにこやかな表情や指名・対応である。子どもは、良くも悪くも常に教師の様子を見ている。教師があたたかな表情・対応をしていれば、子どもも安心し落ち着いて授業に取り組むことができるのである。

例えば、教師の発する言葉である。発問や指示、説明をするにも、教師の発する言葉が明瞭かつ明確でなければ、子どもは何をするのか分からず、混乱し学習活動が十分に保障されない状況に陥りかねない。また、教師の発する言葉は、できるだけ短くすることが大切である。たくさん(長く)言えば言うほど、子どもは分からなくなるのである。大人だって同じである。とくに、軽度発達障害しょうがいをもつ子どもには、長い話は禁物である。

いくつか例を挙げたが、これらのことは教師として授業を行う上での「いろは」の「い」である。しかしながら、私を含めて管理職がこれまでの校内研修や職員個人に対して、どれだけの指導・助言をしてきただろうか。自戒の念を込めて、反省したいところである。

## 2

「よい」授業を「創る」ためには、前述の「いろは」の「い」を踏まえた上で授業づくりの「基礎体力」を付けることが必要である。現実的には、「一つの技能が身に付いてから次の技能を身に付けていく」というより、むしろマルチに同時進行的に教師修業をしていかなければならないかもしれない。

では、どのようにして基礎体力を付けていくのかというと、これが一番である。

優れた先行実践を、そのまま真似る。

「追試」という。先人の残した先行実践、とくに、優れた実践をそのまま実践するのである。それを、何回も何回も、いくつもいくつも行うのである。そうすると、不思議なことに授業について「何となく分かってくる」ことがある。さらに、それを続けていくと、「理由を付けて分かる」ようになってくる。

「守破離」という言葉がある。武道や芸能など、技芸の世界でよく使われる言葉であるが、人が成長していく重要なステップ・上達論でもある。この守破離と同じで、大事なことは、まずは真似ることから始めるということである。

とかく教師(教育)の世界では、この「真似る」ということを蔑視したり軽視したりする嫌いがあるように思われる。「人真似は良くない」と。しかし、それは大きな誤解であり、初めは大いに真似ることがその後の上達に欠かせないのである。スキーでも、インストラクターのすぐ後ろについて滑る子が一番上達する、と言われる。優れたお手本を直接見て、その動きを真似ようと滑るからである。

追試について、「書いてある通りにやってみたけど、全然、上手くいかなかった」と、いう話もよく聞く。私が思うに、これには3つ原因があると考えられる。

一つは、書かれてあるその通りに忠実に実践せず、「工夫という名の勝手な解釈と変更」をしてしまったことによる。二つ目は、学級の実態がその実践に合っていなかったことによる。例えば、その実践を行うに必要な力が子どもに育っていなかった、などである。三

つ目は、その先行実践に何らかの間違いか嘘がある場合である。

追試をして上手くいかなかった場合の多くは、一つ目の原因によるものである。良かれと思って工夫したことが、実はその先行実践を台無しにしてしまった。または、その通りに行った「つもり」になっている、などがある。これを「我流」という。私自身、何度もこの我流により、痛い目を見てきた経験があるからよく分かる。ここで大切なのは、決して「子どものせい」にしないことである。子どものせいにした途端、教師力の向上は停止し、それどころか下降を辿る。「よい」授業を創ることなど、夢の又夢になるのである。

やはり、「守破離」の「守」を地道に積み重ねていくことが、「破」「離」つまり「創」ことができるようになるための一番の近道なのである。管理職は、学校経営の中でこのことをこそ、きちんと職員に指導していくことが必要なのである。これまた、自戒の念を込めてである。

### 3

もう一つ述べておきたいことがある。これである。

優れた力のある教師による「よい授業」を、実際にたくさん見る。

こうした機会を多く設定していくことも、管理職の大切な仕事（指導）なのである。

「百聞は一見に如かず」であり、本で学ぶことも大切な事であるが、やはり実際の授業をライブで見るのが一番である。教師の表情、言葉の発し方、語調、抑揚、間、目線そして、教室の空気など目で見て肌で感じることは計り知れない。それだからこそ、職員にはより多く公開研究会や講座等に参加するよう、参加できるようにしていく必要がある。

そのためには、参加できる校内体制を作ることと、積極的な「紹介」をしていくことである。昨年度は2回、前任の勤務した町内の学校で公開研究会が開催された。そのいずれにも、勤務校職員の担任は1回1名を除き、全員が参加した。その間の補欠授業を、私がすべて受け持つことで時間を作ったのである。小規模校だからこそ出来たことでもあるが、担任団には好評であった。職員が学んでくれるのであれば、管理職はいくらでも労を惜しまないものなのである。

近くで公開研究会や各種講座が開催されても、そこで行われる授業や講座が残念ながら「よい」ものばかりとは限らない。それならば、いっそのこと「自分でやってみせる」ことも選択肢の一つに加えたい。管理職たる者、「授業で語れねば務まるまい」の気概の下、授業をしてみせるのである。私自身、「授業のできる校長」でありたいと思っている。

今年4月、小清水町に異動となった。小清水町は小学校が昨年度再編・統合となり、小学校と中学校がそれぞれ1校ずつとなった町である。中学校には、本会副塾頭の長野藤夫氏が校長を務めておられる。長野校長は全学年・全学級で「道徳の授業」を実践しており、なおかつ、その授業内容は正に圧巻である。見る者を惹きつけ、考えさせる授業である。身近にこうした授業実践者が居ることは、幸運の他ない。是非、本校職員には長野校長の授業を参観させたいと考えている。（なお、長野校長の道徳授業は、保護者をはじめ教育関係者に対し、町内はもとより管内・管外、日本全国に公開されている）

授業を見る際に、これがあると無いとでは大きな違いがある。

#### 力のある者による解説

「有れども見えぬ」ことは多い。どこが優れているのか、何が良いのか、何のためにしているのか等々、解説されて初めて分かる・気付くものである。そのためには、力のある者の解説を得ることである。力のない者による解説は、「百害あって一利なし」である。

優れた解説を得て学び、学んだことを「真似てみる」ことで授業力、授業を創る力が付いていくのである。

なお、授業を見た時に「大したことはないなあ」と思ったら、それは自分と同じレベル。「なかなか良いなあ」と思ったときは、それは自分よりもかなり上のレベル。「これは凄い」と思った時には、そのレベルは計り知れなく高く雲の上のものである、といった主旨のことを TOSS 代表の向山洋一氏が述べていたことを覚えている。

今一度、肝に銘じておきたい指標である。

優れた実践を本や講座・各種研修会などで学び、優れた授業を実際に参観し学ぶことは、大切な大切な教師修業である。

しかし、本当に大切なことはそれらを踏まえた上での次のことである。

#### 日々の弛まぬ地道な授業実践

やはり、これなくして授業の上達はないのである。

そして再度、繰り返す。これである。

#### まずは「真似る」ことから始めよ

さらに、より確かな授業の上達のためには、これも欠かせない。

#### 誰かに授業を見てもらう

誰かに見てもらい、検討し指摘してもらう。そうすることで、自分では気付かないもの・ことを認識することができるのである。やりっ放しはダメなのである。

こうした地道な積み重ねがあって初めて、授業づくりの「基礎体力」が備わっていくのである。